

Title	ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究：伝記4
Sub Title	James Baldwin : a critical biography 4
Author	辻, 秀雄(Tsuji, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.80 (2024. 9) ,p.1- 20
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20240930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究 ——伝記4

辻 秀 雄

本プロジェクトは、アフリカ系アメリカ人作家ジェイムズ・ボールドウィン（James Baldwin）を主題としたモノグラフ執筆を準備する基礎研究である。同書は、作家の紹介ののち、続く各章で長編を一本ずつ論じていく構成をとる。その作家紹介部にあたる伝記研究を成すのが本稿である。

伝記4はボールドウィンの晩年の約20年間を扱う。多角化するボールドウィンの活動を時系列に沿ってまとめると同時に、この時期に彼が言明しようとしていた人種観を今日的視座から検討することで、その意義を明らかにすることを目指す。

南仏時代（1969–1987年）

ボールドウィンが脚本を担当するというかたちでの *The Autobiography of Malcolm X* の映画化計画が頓挫し、しばらく拠点を置いていたカリフォルニア（California）を去った彼は、ヨーロッパ（Europe）を經由して再びイスタンブール（Istanbul）へむかう。以降、公民権運動に全く関わらないということではなくとも、積極的な関与は行わなくなる（Leeming 301–02）¹⁾。西海岸を離れたことは、その転換点となったのだ（Pavlić 65, 75）。

*The Autobiography of Malcolm X*の映画化にまつわる苦労や計画の頓挫の影響もさることながら、この時期ボールドウィンには様々な問題に直面していた。かつてアシスタントのような役割を担っていたトニー・メイナード (Tony Maynard) が冤罪の疑いが極めて高い殺人容疑によって収監されていたほか、ボールドウィンは当時の恋人との関係に悩まされもした²⁾。彼は、かつてのパリ (Paris) でと同様、睡眠薬を過剰服用して病院にかつぎこまれるところまで追い詰められていた (Leeming 301; Manditch-Prottas 165)。1968年にはマーチン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr.) そしてロバート・ケネディ (Robert Kennedy) の暗殺が起きており、自身が次の暗殺の対象になるのではないかと不安もつきまとうなか (Manditch-Prottas 165)、キング暗殺による公民権運動の転機や限界を、ボールドウィンは強く意識していた³⁾。

1970年、イスタンブールに滞在するボールドウィンを、体調不良が襲う。肝炎を患ったのである。症状が治まったのち、セダト・パカイ (Sedat Pakay) という名の若きトルコ人写真家、映画監督の依頼を受け、映像作品に出演しているものの、体調は万全ではない⁴⁾。そんななか夏には一時母国へ帰国を果たし、約束していたとおりに文化人類学者のマーガレット・ミード (Margaret Mead) と対談を行っている。この対談は翌年の1971年に *A Rap on Race* として出版された。パリに戻って新たなエッセイ集 *No Name in the Street* (1972) の執筆を進めていたボールドウィンを、また体調不良が襲う。1970年10月のことだ。入院した彼に南仏での静養を勧めたのが、旧知のメアリー・ペインター (Mary Painter) であった。ボールドウィンは、彼女の助言を聞き入れ、南仏はプロヴァンス (Provence) のサン・ポール・ド・ヴァンス (Saint-Paul-de-Vence) のホテルに部屋を借りた。翌年1971年3月には、このホテルから通りをはさんだむかいに位置するアパートを借り、のちにそれを購入するにいたる (Leeming 309-12)。

そのアパートはかつてジョルジュ・ブラック (Georges Braque) がアトリエを構えていた建物で、アルジェリア (Algeria) 出身のジャンヌ・フォー

レ (Jeanne Faure) が所有していた。アルジェリアから亡命してきた彼女は、その来歴からアフリカ系の人々に対する嫌悪を隠し立てすることはなかった。しかし、ほどなくして彼女はボールドウィンと親しい友人関係を築くことになる (Leeming 312-13)。ボールドウィンは、食道癌で 1987 年 12 月 1 日に息を引き取るが、それはこの南仏の家でのことである。

また、ここは、最晩年にボールドウィンが取り組んでいた未発表の戯曲 *The Welcome Table* の舞台ともなった⁵⁾。この演劇は、ある高名なアフリカ系アメリカ人研究者のサン・ポール・ド・ヴァンス訪問から着想を得たとされる。その研究者とは、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア (Henry Louis Gates, Jr.) である。ピーター・デイヴィス (Peter Davis) という名のジャーナリストとしてフィクション化されたゲイツは、1973 年 8 月、ケンブリッジ大学 (University of Cambridge) 留学中の夏季休暇の間従事していた *Time* 誌の記者としてサン・ポール・ド・ヴァンスを訪れ、ボールドウィンにインタビューを行っている。その際ゲイツは、もう一人インタビューを行いたいと考えていたジョセフィーン・ベイカー (Josephine Baker) をエスコートしてボールドウィン邸を訪ねた。ベイカーが、ボールドウィンと一緒にあればインタビューを受けると条件を出し、それを聞いたボールドウィンが提案して実現したのが、このなんとも贅沢な鼎談である (Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 83; Leeming 320)⁶⁾。ジョセフィーン・ベイカーもまた *The Welcome Table* の登場人物としてフィクション化されるが、その登場人物にはベイカーだけではなく、ニーナ・シモン (Nina Simone) の影も認められるという (Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 83)。そのほかのほとんどの登場人物たちも、ボールドウィンの南仏の家まつわる実在の人々をモデルとする。

そのニーナ・シモンもまた、サン・ポール・ド・ヴァンスへの来客の一人であったのだが (Leeming 336)、ほかにも、マイルス・デイヴィス (Miles Davis)、ボビー・ショート (Bobby Short)、マヤ・アンジェロー (Maya Angelou)、ハリー・ベラフォンテ (Harry Belafonte) らが同地にボールドウ

インを訪ねた。1970年代初頭には、トニ・モリソン (Toni Morrison) が息子連れて一週間ほどボールドウィンのもとに滞在したという (James 69–70)。

彼の人生の最後の約 20 年間を南仏時代としたが、あいかわらずボールドウィンはアメリカ (America) を含む世界中を移動していくのみならず、その活動はさらに多角化していく。共演や協業も増えていった。マーガレット・ミードとの 1970 年の対談についてはすでにふれたが、それ以外にも、獄中のアンジェラ・デイヴィス (Angela Davis) への公開書簡の送付がある。囚人のデイヴィスをモチーフにした *Newsweek* 誌 1970 年 10 月 26 日号の表紙デザインに触発されたボールドウィンが発表したこの公開書簡は、“An Open Letter to My Sister Angela Y. Davis” と題されて *The Cross of Redemption: Uncollected Writings* に収められている (Leeming 311)。また、翌 1971 年 11 月には、詩人のニッキ・ジョヴァンニ (Nikki Giovanni) とロンドン (London) でアメリカのテレビ番組のために対談を行っているが、それは *A Dialogue* として 1973 年に出版されている (Pavlić 6)。

さらには他ジャンルの芸術家との共演も果たした。その相手、レイ・チャールズ (Ray Charles) は、ボールドウィンがかねてから目標としていた芸術家である。ボールドウィンがレイ・チャールズを愛聴し始めた時期は定かでないが、ファーン・マージャ・エックマン (Fern Marja Eckman) による伝記では、1950 年代半ば、執筆の孤独をまぎらわすために大音量でレイ・チャールズとマハリア・ジャクソン (Mahalia Jackson) のレコードをかけていたとの記述がある (133)。1960 年代も *Another Country* が出版されたころになると、彼はより意識的に自らの創作の源として黒人音楽家たちの名前を挙げるようになる。*Another Country* がベストセラーリスト入りしたことへの著者の反応として *The New York Times Book Review* に掲載された短いコメントにおいてボールドウィンは、「自分をほかの作家と比べることはしないが、どうしてもなくジャズミュージシャンたちを手本として、彼らが音を紡ぎ出すように書こうと努めている」と語る。そう

した創作における手本としてボールドウィンが名前を挙げたミュージシャンの筆頭がマイルス・デイヴィスでありレイ・チャールズであった(“From *What’s the Reason Why?: A Symposium by Best-Selling Authors: James Baldwin on Another Country*”; *The Cross of Redemption* 39–40)。1960年代中盤のこの時期、ボールドウィンは自身の創作のモデルを黒人音楽家に求める趣旨の発言を繰り返しているが(Campbell 181–82; Eckman 242)、ボールドウィンのブルース論、“The Use of Blues”が出版されたのも1964年のことだ(*The Cross of Redemption* 所収)。そして、1973年7月1日、“The Hallelujah Chorus”と名付けられたレイ・チャールズの公演に、ボールドウィンもこの機会のために書き下ろした文章の朗読者として参加したのである⁷⁾。

なお、ボールドウィンが賞賛したアフリカ系アメリカ人ミュージシャンとしては、アレサ・フランクリン(Aretha Franklin)の名前も挙げられる。1968年3月、カリフォルニアでマルコムX(Malcolm X)を題材とした映画脚本を執筆していた際、前年に発表された彼女のアルバム、*Aretha Arrives*を聴き込んでいたという。“I Wonder”という楽曲での彼女の声が、個人的で親密であると同時に広く人々に語りかける、相反する性質を合わせ持っていると感じたボールドウィンは、自身の脚本執筆にそれを生かせるよう奮闘している旨、兄弟たちへの手紙に記している(Pavlić 77)。

1973年秋には*If Beale Street Could Talk*を書き終え、同書は翌1974年に出版される。74年3月にはこれまでの業績を称えられてセント・ジョン・ザ・ディヴァイン大聖堂(Cathedral of St. John the Divine)よりメダルを授与された(Leeming 321–22)。

*If Beale Street Could Talk*に続くのは、ヨラン・カザック(Yoran Cazac)との共作となる子供向けの絵本*Little Man, Little Man*(1976)、同年出版の自伝的映画論*The Devil Finds Work*、そして1979年出版の最後の長編小説、*Just Above My Head*である。

*Little Man, Little Man*の挿絵を担当するイタリア人画家のヨラン・カザックとはビューフォード・ディレイニー(Beauford Delaney)を介して以前

から顔見知りであったが、1973年にそのディレイニーが体調を崩したことから、ボールドウィンとこのイタリア人画家との関係が親密なものへと変化する。カザックはイタリアに家庭を持っており、その家族への愛情を持ち続けたが、ボールドウィンとしては彼と「結婚」しているというようにも考えるほどに深い関係であった (Pavlić 168; Leeming 319)。 *Giovanni's Room* がルシアン・ハッパースバーガー (Lucien Happersberger) に捧げられている一方、 *If Beale Street Could Talk* は “Yoran” に捧げられている (Leeming 319)。

この *Little Man, Little Man* が持つ意義を、伝記作者デヴィッド・リーミング (David Leeming) は3点にまとめている。もともとこの本は7歳の甥を念頭に書かれたものであるが、次世代を担う子供たちへのボールドウィンの想いが具現化したものである。同時に、ちょうど本作が仕上がりつつあった時期に生まれた、自身の2人の妹たちの赤ん坊たちの出産を祝うものでもあった。さらに、同書は、1975年4月に亡くなった、子供たちの保護活動を熱心に行っていたジョセフィーヌ・ベイカーを追悼する作品でもあった (330)。子供向けの絵本をこの時期に創作したボールドウィンは、自身のレガシーを後続世代にどう残すかということにも目を向け始めていたことがわかる。

南仏時代におけるボールドウィンと次世代とのつながりという観点では、新進のアフリカ系アメリカ人女性作家たちとの関係、そして大学での講義の担当という二つの領域における活動が目を引く。1970年代、80年代は、アフリカ系アメリカ人女性作家たちが頭角を現した時期だ。これまで本章が言及してきたマヤ・アンジェロー、ニッキ・ジョヴァンニ、トニ・モリソンは先輩作家のボールドウィンを好意的に受け止めており、また、ボールドウィン自身、ゲイル・ジョーンズ (Gayl Jones)、オードリー・ロード (Audre Lorde)、アリス・ウォーカー (Alice Walker) といった新世代のアフリカ系アメリカ人女性作家たちの作品を評価していた (Vogel, “Decline of Reputation in the 1980s” 82; Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 11)。

トニ・モリソンには、1970 年代初頭、彼女がランダム・ハウス (Random House) の編集者をしていたころに出会っていたが、以降ボールドウィンと彼女は様々な機会に顔をあわせることになる (Leeming 320, 335, 353, 367; King 2)。モリソンはのちに Library of America 版のボールドウィンのエッセイ集と前期小説、短編集の編集を担当しているのだが、興味深いのは、影響関係はボールドウィンからモリソンへという一方通行ではなかったことだ。研究書 *James Baldwin and Toni Morrison: Comparative Critical and Theoretical Essays* の序論において、編者の一人であるラヴァルリー・キング (Loverly King) は、*If Beale Street Could Talk* や *Just Above My Head* といったボールドウィンの後期長編小説には、モリソンの *The Bluest Eye* (1970) や *Song of Solomon* (1977) の影響が見て取れると論じる。ボールドウィンのこれらの小説が、彼独自のやり方であったにせよ、モリソンの家族小説におけるテーマ——人種的な自己嫌悪の問題といった人種内の力関係や、白人の覇権に対する抵抗の可能性を秘めた場所としての家庭というテーマ——に取り組んでいるように見えるからである。物語のプロットの構造や装置の選択において、ボールドウィンがモリソンから学んだことも多い可能性が指摘されている (5)。

このような文学における後続世代との関係にとどまらず、ボールドウィンは若者世代との関わりを築いていく。それは大学のキャンパスにおいてだ。きっかけは、1977 年の春、ボーリング・グリーン州立大学 (Bowling Green State University) での講演を引き受けたことにある (Leeming 336)。翌年の春、そのボーリング・グリーン州立大学で、今度は二カ月間授業を受け持つ依頼を受けたのである。これを皮切りに、さらに翌年の 1979 年には、カリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) でも授業を行う。こうして講座を持ちながら、その期間、比較的長期にわたってアメリカに滞在することになる (Leeming 337)。

1978 年 5 月に教え始めたボーリング・グリーン州立大学では、ボールドウィンに声をかけたエスニック・スタディーズ学科のアーネスト・チャ

ンピオン (Ernest Champion) の助けもあり、授業は成功したという。リーミングによれば、彼は授業の教材として自身の著作、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner)、フィリップ・ロス (Philip Roth) の *Goodbye, Columbus* (1959)、ハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe) の *Uncle Tom's Cabin* (1852) などを指定したものの、実際の授業は、人種アイデンティティなどをテーマにしたディスカッションを中心に、受講者を巻き込んで行われた。学生があまりにナイーブな質問をしたとしても、それは「他人の経験に入り込む」ために「その相手を知ろうと」して発せられた質問であるとボールドウィンはとらえた。そうした質問が常識外れに響いても、むしろそれはある意味で望ましいのであり、現状の「平穏」——すなわち常識——を揺るがすような人々を育てることこそ、教育の目的であるとボールドウィンは考えていた (Leeming 339-41)⁸⁾。

ただし、ボールドウィンにとって、決まった時間に定期的に行われる授業を担当するのは至難の業であり、相当周囲の手助けが必要であった。1979年の秋、そして1981年の秋にも同大学で講義担当が決まったのだが、1981年秋にはウェイン州立大学 (Wayne State University) がボールドウィンを強引にリクルートし、彼を取り戻す必要すらあった。また、学外のような行事への参加でボールドウィンが不在の際には、チャンピオンらが代講を行った (Leeming 339-41)。

1979年春にはカリフォルニア大学バークレー校での授業担当も引き受けていたのだが、同年前半にはいくつかの出来事があった。まずは2月、サン・ポール・ド・ヴァンスに戻ったボールドウィンは *Just Above My Head* を完成させた。しかし、5月、体調を崩していたビューフォード・ディレイニーが亡くなる。ディレイニー逝去の影響からボールドウィンは落ち込み、カリフォルニア大学バークレー校での約束を一週間延期させたという。しかしむしろ、結局カリフォルニアに赴いて日々を活動的に送ったことが功を奏したと、リーミングは指摘する (341-42)。ボールドウィン到着を祝した宴会には、イシュメル・リード (Ishmael Reed)、アンジェ

ラ・デイヴィス、セシル・ブラウン (Cecil Brown)、ヒューイ・ニュートン (Huey Newton) といった著名人、文化人が集まり、その喧噪においてレイニー死去がもたらした喪失を半ば埋めることができたのである (Leeming 342)。

バークレーにボールドウィンを呼び寄せたのは、Afro-American Studies Departmentのアースキン・ピーターズ (Erskine Peters) であった (Leeming 342)。人種意識の高まりによって1960年代終わりから制度化され始めたアフリカン・アメリカン・スタディーズが、1970–80年代には多くの大学において開講されることになるのだが (Johnson and Henderson 3)、必ずしもこうした傾向とボールドウィンの立場が問題なく重なり合ったというわけではない点は注意が必要だ。というのも、白人が主流派を占めるアカデミアにおいてブラック・スタディーズが制度化されるにあたり、どうしても「人種的な黒さ」が焦点化されて他の重要なカテゴリーを排除してしまったからである (McBride 84)。こうして築き上げられる人種的な黒さは、暗示的に「異性愛」の「男性」と代理表象される (McBride 77)。ゲイであることを公にして活動した初のアフリカ系アメリカ人作家であったボールドウィンと、暗に想定される「代表的黒人像」には、乖離がある (McBride 72, 77)。

この乖離は、リロイ・ジョーンズ (Leroi Jones) やエルドリッジ・クリーヴァー (Eldridge Cleaver) によるボールドウィン非難の言辞に如実に反映されている。リーミングが指摘するように、ボールドウィンはジョーンズらの下の世代からしばしば「アンクル・トム」と揶揄されていた (“Baldwin as Teacher” 63)。白人にとって都合のよい黒人、を意味する蔑称である。特にエッセイにおいて舌鋒鋭くアメリカにおける人種差別を批判してきたボールドウィンに対して使われる言葉としては、そぐわないように思われる。しかし、彼らの思考によれば、ボールドウィンのふるまい——ジョーンズがボールドウィンに言及して用いる “the spavined whine and plea,” “Joan of Arc of the cocktail party” といった言葉が暗示する女性的なふるまい

(Gates, “The Fire Last Time” 40; Jones 115) ——と彼の同性愛——クリーヴァーは *Another Country* を批判する文脈で、白人との同性愛関係にうつつを抜かす「去勢された男」と登場人物の一人をけなす (Cleave 132) ——は、ボールドウィンの裏切りの証拠にほかならない。白人が支配する抑圧的な社会に相対、打破すべき強いアフリカ系アメリカ人男性像に、ボールドウィンが合致しないという批判であり、また、同性愛を白人社会における病としてきたアフリカ系アメリカ人コミュニティにおいて (Johnson and Henderson 4), 彼は逸脱した存在となるのである。父権の男性リーダーを指導者に据えた公民権運動やブラック・パワー運動をアカデミアにおいて引き継いだアフリカン・アメリカン・スタディーズにとって (Johnson and Henderson 3), ボールドウィンの存在は許容しがたいものであった。

しかし、だからこそ、ボールドウィンが言語化する人種概念には、今日の人種観と通じる新しさがある。人種を本質化せず、また、人種を他のアイデンティティ・カテゴリーと分け隔てないでとらえる見方などがその特徴である。前者については、1979年1月にカリフォルニア大学バークレー校で行った講演にその一端をうかがうことができる⁹⁾。ボールドウィンは、移民がアメリカの主流派へ同化していく過程を次のように表現している—— “When the Italian got here or the Greek or whoever, there was a moment in his life when he had to start to speak English, when he became a guy named Joe. And that meant he couldn’t speak to his father, because his father couldn’t speak English. That meant a rupture, a profound rupture. So some did become a guy named Joe and never found out anything else about himself” (qtd. in Pavlić 270)。移民がアメリカの主流派白人へ変化することを「ジョーになる」と表現するが、それは単に移民の子供世代がアメリカ的なファーストネームを得て、英語を話せるようになる、という順化の過程だけを指し示すのではない。アメリカ人となった青年が「自分自身についてそれ以上のことを見出しはしない」という哀れみを含んだ指摘には、1950年代のボールドウィンがすでに喝破していた、アメ

リカの白人の歴史認識の欠如に対する糾弾の響きを聞き取ることができる。ボールドウィンは、この講演において、「マルコムが言ったように、そもそも白さというのは「心のあり様 (state of mind)」なのである」(qtd. in Pavlić 270) という点を明確にしているが、アメリカの白人になるというのは、肌の色による区分に従って社会生活を送ることのみを言い表しているのではなく、そのような社会生活がもたらす、自己批判の欠如したナイーブな精神構造を指し示す呼び名ともなっているのである。

同時に、多様なエスニックバックグラウンドを持つ移民たちが主流派白人へと同化していく過程を指摘した上の引用には、白人と黒人という二項対立の人種関係において、無色透明な基準とされてきた白人側の立場もまた歴史的に構築されたカテゴリーであり、無標ではない、という洞察が打ち出されてもいる。たとえばアイルランド系やユダヤ系がどのようにアメリカにおいて白人性を獲得していったのかという歴史的経緯をたどりながら、白人という人種カテゴリーもまた構築された概念であることを明らかにしてきたホワイトネス・スタディーズと同様の視座である。以上みてきたように、アメリカ白人を自己認識や歴史観——というよりもむしろそれらの欠如——において定義する視座、あるいは、多様なエスニックバックグラウンドを一つの無標な人種カテゴリーへと作りかえる概念として白人性をとらえるその見方において、ボールドウィンは、人種を本質主義的には理解していない。

もう一つの鍵概念となるのが、インターセクショナリティである。1990年前後に登場した用語であるが、アフリカ系アメリカ人のフェミニスト研究者たちが、人種をそれ自体で存在する単独の排他的なカテゴリーとして見なす傾向を修正する文脈で、人種をジェンダーや階級といった他のカテゴリーとの重なりにおいてとらえる意義を強調するために盛んに用い始めたのが、この言葉である (Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 12, 148 n45)¹⁰⁾。

しかし、インターセクショナリティが明確な用語として登場する以前か

ら、概念としてのそれはすでにアフリカ系アメリカ人女性たちが感じ取り、表現してきたことでもある。1970年代、80年代におけるアフリカ系アメリカ人女性文学者たちの台頭を振り返り、ボールドウィンは1986年のある講演において、「彼女たちが言っていることはいくぶんぞっとさせるが、真実」であり、彼女たちこそ「とても危険な神話から私たちを掘り出してくれている」と語る (Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 11)¹¹⁾。ボールドウィンが言う「とても危険な神話」が何を意味するのかを探るために、アフリカ系アメリカ人女性文学者の一人であるオードリー・ロードとの対談、そして1985年に *Playboy* 誌に掲載されたエッセイ、“Freaks and the American Ideal of Manhood” をみてみたい。

フェミニスト批評家、詩人、作家のオードリー・ロードとの対談は、1983年、ハンプシャー大学 (Hampshire College) で行われた。そのなかで、ジェンダーについて真正面から取り組むよう呼びかけたロードに対して、ボールドウィンも応じる。「西洋における女性性のとらえ方は、必ずしも女性の実際のありようとは限らない」としてロードに同意するのに続けて、ボールドウィンは言う——“And there’s certainly not a standard of masculinity in this country which anybody can respect. Part of the horror of being a Black American is being trapped into being an imitation of an imitation” (qtd. in Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 53–54)。ボールドウィンは、白人アメリカ人男性の無邪気さ、あるいは無責任さを痛烈に批判してきたが、ここでは、アフリカ系アメリカ人男性が、えてして人種の境界線を折り線として白人アメリカ人男性を反転させた存在になっていることがある、ということと言わんとしていると考えられる。すなわち、白人男性が生きる幻想をアフリカ系アメリカ人男性も生きてしまっているとする糾弾だ。このようにとらえるならば、アフリカ系アメリカ人男性は人種というカテゴリーの下位区分としてのみ存在しているのではなく、人種と、男性性というジェンダー規範の双方のカテゴリーに同様にそして同時に規定されているということになる。

このオードリー・ロードとの対話に大いに触発された可能性があることが指摘されているのが、対談の直後に書き始められたエッセイ、“Freaks and the American Ideal of Manhood”である(Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 54)。あらゆる人間は、生物学的にではなくとも内面において「両性の特徴を備える(“androgynous”)」と論を説き起こすボールドウィンは、そうした考えが「人を麻痺させるほどに幼稚な」男性性に基づくアメリカにおけるセクシュアリティのとらえ方を成熟させる可能性を示唆する(*Collected Essays* 814)。それは、自身の(同性愛的)性の目覚めを通じて、ボールドウィン自身が経てきた道のりでもある。そもそも、アメリカ的セクシュアリティは、様々な二項対立の関係——“cowboys and Indians, good guys and bad guys, punks and studs, tough guys and softies, butch and faggot, black and white”——を生んだ(*Collected Essays* 815)。しかし、若くして白人男性とも恋愛関係をもったボールドウィンは、このような「アメリカ的区分」——“the American categories of male and female, straight or not, black and white”——が粉々に打ち碎かれるのを実感する(819)。この過程にはもちろん苦痛が伴う。しかし、その意義は大きい——“Not without anguish, certainly; but once you have discerned the meaning of a label, it may seem to define you for others, but it does not have the power to define you to yourself”(*Collected Essays* 819)。アメリカ的区分に基づくラベルは、個人を型にはめて他人がその人のことを理解する助けにはなる一方、それは自分自身を定義する力を持ちはしない。すなわち、ラベルは自分自身の探求の助けになることもなければ、ラベル貼りが自分自身にとって満足のいく結果をもたらすこともないのである。二項に単純化されたラベルは、個人がもつ多様性や複雑さをすくいとることができない。そうした単一のラベルの欺瞞を見破るボールドウィンは、さらに、ジェンダー、セクシュアリティ、そして人種といったカテゴリー区分自体が、恣意的な単純化であると示唆しているように聞こえる。アメリカ社会が個人に押し付けるカテゴリー区分は、単一カテゴリー内における二

項対立的な区分においてだけではなく、そのカテゴリー区分そのものにおいてもまた、幼稚なものであるはずだからだ。“It is an ideal [the American ideal of sexuality] so paralytically infantile that it is virtually forbidden—as an unpatriotic act—that the American boy evolve into the complexity of manhood” と語るボールドウィンにとって、一人前の大人としての複雑さがセクシュアリティに限定されず、人種やジェンダーの区分における二項対立をも疑問視するものであることは明らかなからだ (815)。セクシュアリティがそれだけで問題であるわけではなく、それがむしろ人種やジェンダーと切り離された単一のカテゴリーの問題のように偽装されていることを指摘することで、ここでもボールドウィンはインターセクシヨナリティに近い知見を発揮していると言える。

付言すれば、以上のようなボールドウィンの人種のとらえ方は、アカデミアにおける人種の理解が進展するにつれ、評価が進んでいくことになる。すなわち、ジョゼフ・ヴォーゲル (Joseph Vogel) が指摘するように、“Freaks and the American Ideal of Manhood” において開示された、「人間に備わる両性性 (“androgyny”) の転覆的な可能性に対するボールドウィンの関心は、当時勃興しつつあったブラック・フェミニスト運動と多くの点において同調しており、また、クイア理論や文化研究におけるのちの展開を予期させるものであった」 (*James Baldwin and the 1980s* 51)。実際、2005 年に出版されたアンソロジー、*Black Queer Studies: A Critical Anthology* に収められた “Straight Black Studies: On African American Studies, James Baldwin, and Black Queer Studies” と題された論考において、ドゥワイト・A・マクブライド (Dwight A. McBride) は、ボールドウィンのゲイ、黒人、国籍離脱、アクティヴィストといったラベルに排他的に位置づけられないあり方、むしろ、こうしたラベルが複雑に関係づけられた総体として生き、創作し、言葉を紡ぎ出した彼のあり方に注目し、そうした複雑さは、文化研究の学際的な方法論と感受性に裏打ちされたブラック・クイア・スタディーズの研究手法によって明らかにされうるものであ

るとする (75)。

以上みてきたように、白人性が構築された人種カテゴリーであることを明らかにするホワイトネス・スタディーズや、人種をジェンダー、セクシュアリティ、階級といった他のカテゴリーとの重なりにおいてとらえるインターセクショナルリティといった観点から再検討されることになる人種概念に近いものを、1980年代のボールドウィンは言語化しようとしていた。この時期はまた、ボールドウィンがかなり長期に渡ってアメリカで生活を送っていた期間でもある。先述したように、1978年にボーリング・グリーン州立大学で講義を受け持ったボールドウィンは、それがきっかけで母国での活動を再開していく。南部を再訪したほか、他大学への出講依頼を受けていくのである。

南部再訪のきっかけは、少なくとも部分的には、ボールドウィンをボーリング・グリーン州立大学へ招聘したアーネスト・チャンピオンによってもたらされた。1980年春にフロリダ州ゲインズヴィル (Gainesville, Florida) はフロリダ大学 (University of Florida) にて開催された the African Literature Association の年次大会において、ボールドウィンとナイジェリアの作家、チヌア・アチェベ (Chinua Achebe) による対談を彼が設定したのである (Leeming 353)¹²⁾。

これを皮切りに、ボールドウィンは4、5月と南部の諸都市を再訪していく。ワシントン DC (Washington D.C.), ジョージア州アトランタ (Atlanta, Georgia), アラバマ州セルマ (Selma, Alabama), ミシシッピ州ジャクソン (Jackson, Mississippi), 同州ファイエット (Fayette), ルイジアナ (Louisiana) などである。それぞれの地で彼は、スターリン・ブラウン (Sterling Brown), ジョン・ルイス (John Lewis), ジェイムズ・メレディス (James Meredith), メドガー・エヴァーズ (Medgar Evers) の兄のチャールズ・エヴァーズ (Charles Evers), ジェローム・スミス (Jerome Smith) と再会を果たしていく (Leeming 354-55)。ジョゼフ・ヴォーゲルによれば、ボールドウィンのこの旅は、*New Yorker* の依頼の結果でもあった。ボールドウィンが「新し

い南部」を訪ね、公民権運動の遺産について思いを馳せるという趣旨の企画を同誌が立てたのである。記事としては実現しなかったものの、かたや、この旅に同行したイギリスの映像作家ディック・フォンテーン (Dick Fontaine) とその妻であるアフリカ系アメリカ人の女優パット・ハートレイ (Pat Hartley) がボールドウィン活動をカメラに収め、それは1982年に *I Heard It through the Grapevine* として発表されることとなった (*James Baldwin and the 1980s* 123)。

「新しい南部」とは、少なくとも表面的には公民権運動によって人種間の垣根が取り払われ、なおかつ経済活動が活発化した、アトランタのような都市を指して使われる (Vogel, *James Baldwin and the 1980s* 125, 127)。しかし、旅全体を通じて、ボールドウィンは南部の変化に懐疑的にならざるをえなかった。そもそも旅ののっけからして、ボールドウィンは南部の旧態依然としたあり方を痛感したに違いない。ゲインズヴィルで、ボールドウィンが the African Literature Association の開会の辞を述べるためにひな壇に上がった時、何者かが会場のホテルの音響システムに入り込んで、妨害が行われたのである。「ボールドウィン氏よ、このようなことにはがまんがならないから、中断せよ」という男性の声に対してボールドウィンは、ひるむことなく立ち向かった——“Mr. Baldwin is nevertheless going to finish his statement. And I will tell you now, whoever you are, that if you assassinate me in the next two minutes, I’m telling you this: it no longer matters *what* you think! The doctrine of white supremacy on which the Western world is based has had its hour—has had its day. It’s over!” (Pavlić 112–13)。しかし同時に、ボールドウィンの勇敢な姿勢は、彼がアメリカ南部における人種差別がいまだ終わってはいないと考えていることを、逆説的に語っている。

おりしもこの時期、アトランタで起きていた連続殺人事件が、全米の注目を集めていた。被害者はアフリカ系アメリカ人の主には子供たちであった。1981年春、*Playboy* のアフリカ系アメリカ人編集者ウォルター・ロウ・

ジュニア (Walter Lowe, Jr.) から、アトランタを訪ね、事件について記事を書くよう、フランス (France) に帰っていたボールドウィンに依頼が舞い込んだのである。こうして1年足らずでアトランタを再訪することになったボールドウィンは、犯人推理のようなものではなく、「新しい南部」たるアトランタの暗部に目を向けようとした (Leeming 356-57)。ボールドウィンがフランスに戻ったあとの6月、アフリカ系アメリカ人のウェイン・ウィリアムズ (Wayne Williams) が逮捕されるにいたり、人種差別を行わない——すなわちカラブラインドである——ことを標ぼうする「新しい南部」が抱える、根深い人種問題が照射されることになる。逮捕を受けて追加の取材にでかけたボールドウィンは、編集者ロウの催促もあって記事を書き上げ、“Atlanta: The Evidence of Things Not Seen” が1981年12月号の *Playboy* 誌に掲載された。さらにボールドウィンは本事件に関心を持ち続け、その後数年にわたって繰り返しアトランタを訪問し、その成果は著作 *The Evidence of Things Not Seen* として1985年に出版されることになる (Leeming 357)¹³⁾。

このようにアトランタに関心を寄せていた時期は、ボールドウィンがマサチューセッツ (Massachusetts) 州所在の諸大学で3年にわたって講座を受け持っていた時期でもある。1983年秋から86年にかけて、マサチューセッツ州のファイブカレッジコンソーシアムに加盟する大学、主にはハンプシャー大学とマサチューセッツ大学アマーフト校 (University of Massachusetts Amherst) で、1年に1セメスターの頻度で授業を担当していくこととなる (Leeming 364)。彼はその3年間に、創作ワークショップ、ヘンリー・ジェイムズ (Henry James)、リチャード・ライト (Richard Wright)、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway)、ボールドウィン自身といった国籍離脱の作家たちについての講義、アフリカ系アメリカ人の文化的経験についての講義といった多様な講座を学生に提供した (Leeming 366)。また、マサチューセッツ大学アマーフト校では、作家のジョン・エドガー・ワイドマン (John Edgar Wideman) と親交を結ぶこととなる (Leem-

ing 365)。

1986年、ボールドウィンは体調を崩し、アメリカの大学へ戻ることをあきらめた。そんな彼にとっての朗報の一つが、同年6月19日にミッテラン大統領 (Mitterrand) より授与されたレジオン・ドヌール勲章 (the French Legion of Honor) であった (Leeming 368)。その後も10月のソ連 (the Union of Soviet Socialist Republics) 訪問などの活動が続けていたものの (Leeming 369)、体調は悪化。翌1987年の4月についに病院で受診したボールドウィンは、食道癌と診断される。直後に手術が行われたが、12月1日、サン・ポール・ド・ヴァンスの自宅で亡くなった。

葬儀は、弟デヴィッド (David) の誕生日にあたる12月8日に執り行われた。会場のニューヨーク市 (New York City) のセント・ジョン・ザ・ディヴァイン大聖堂には数千人の参列者が集い、マヤ・アンジェローやトニ・モリソン、アミリ・バラカ (Amiri Baraka; リロイ・ジョーンズ) が弔辞を述べた。そしてそこに集った人々のなかでも際立ったジェローム・スミスの印象的な姿を、リーミングは記録に残している (387-88)。

Notes

- 1) Leeming からの引用は、以降、それと表記されない限りにおいて *James Baldwin: A Biography* からとする。
- 2) メイナードは1974年に不起訴処分となり、釈放される (Leeming 328)。それまでボールドウィンは熱心に支援を行った。
- 3) キング暗殺はボールドウィンの人生における一つの転機になったほど深い影響を与えた、とウェザビー (Weatherby) は書く (298-300)。文化人類学者マーガレット・ミード (Margaret Mead) との対談中、ボールドウィン自身、キングの暗殺によってアメリカ社会への希望がついえたと言言している (Pratt 121-22)。
- 4) この映像作品は *James Baldwin from Another Place* と題され、1973年にニューヨーク (New York) で上映されている (Leeming 309)。
- 5) *The Welcome Table* という題は、黒人スピリチュアルの “One of These Days” の歌詞に由来するという (Farber 69)。
- 6) Fred L. Standley と Louis H. Pratt 編集の *Conversations with James Bald-*

win にこの鼎談が収められている (Gates, “An Interview with Josephine Baker and James Baldwin”).

- 7) 詳しくは Pavlić を参照のこと (162–89)。
- 8) 1980 年 10 月に *Esquire* 誌に発表されたエッセイ, “Dark Days” において, ボーリング・グリーン州立大学での経験について書かれている (*Collected Essays* 797–98)。
- 9) 本講演は <https://www.c-span.org/video/?170651-1/james-baldwin-speech> にて視聴することができる。
- 10) ブラック・フェミニズムの伝統とインターセクショナリティの概念的な重なりについては, 土屋の論考が簡潔に見取り図を示してくれている。
- 11) 本講演, “The World I Never Made” は <https://www.c-span.org/video/?150875-1/world-made> にて視聴することができる。
- 12) アチェベはボールドウィンを「悲しみに取りつかれた人」と表現した (Weatherby 346–47)。
- 13) アトランタでの子供連続殺人事件とボールドウィンの関わりは, Vogel, *James Baldwin and the 1980s* の第 5 章において詳しく論じられている。

参考文献

- Baldwin, James. *Collected Essays*. Library of America, 1998.
- . *The Cross of Redemption: Uncollected Writings*. Edited by Randall Kenan, Pantheon Books, 2010.
- Campbell, James. *Talking at the Gates: A Life of James Baldwin*. Viking, 1991.
- Cleaver, Eldridge. *Soul on Ice*. 1968. Delta, 1999.
- Eckman, Fern Marja. *The Furious Passage of James Baldwin*. M. Evans, 2014.
- Farber, Jules B. *James Baldwin: Escape from America, Exile in Provence*. Pelican Publishing, 2016.
- Gates, Henry Louis, Jr. “The Fire Last Time.” *New Republic*, vol. 206, no. 22, 1 June 1992, pp. 37–43.
- . “An Interview with Josephine Baker and James Baldwin.” 1985. *Conversations with James Baldwin*, edited by Fred L. Standley and Louis H. Pratt, UP of Mississippi, 1989, pp. 260–69.
- James, Jenny M. “A Long Way from House: Baldwin in Provence.” Miller, pp. 66–75.
- Johnson, E. Patrick, and Mae G. Henderson, editors. *Black Queer Studies: A Critical Anthology*. Duke UP, 2005.
- . “Queering Black Studies / ‘Quaring’ Queer Studies.” Johnson and Henderson, pp. 1–17.

- Jones, LeRoi. *Home: Social Essays*. 1966. Akashic Books, 2009.
- King, Lovalerie. “Baldwin and Morrison in Dialogue.” *James Baldwin and Toni Morrison: Comparative Critical and Theoretical Essays*, edited by Lovalerie King and Lynn Orilla Scott, Palgrave, 2006, pp. 1–10.
- Leeming, David. “Baldwin as Teacher.” Miller, pp. 57–65.
- . *James Baldwin: A Biography*. Henry Holt, 1994.
- Manditch-Prottas, Zachary. “The Assassinations: Medgar, Malcolm, and Martin.” Miller, pp. 157–68.
- McBride, Dwight A. “Straight Black Studies: On African American Studies, James Baldwin, and Black Queer Studies.” Johnson and Henderson, pp. 60–89.
- Miller, D. Quentin, editor. *James Baldwin in Context*. Cambridge UP, 2019.
- Pavlić, Ed. *Who Can Afford to Improvise?: James Baldwin and Black Music, the Lyric and the Listeners*. Fordham UP, 2016.
- Pratt, Louis H. *James Baldwin*. G. K. Hall, 1978.
- Vogel, Joseph. “Decline of Reputation in the 1980s.” Miller, pp. 76–89.
- . *James Baldwin and the 1980s: Witnessing the Reagan Era*. U of Illinois P, 2018.
- Weatherby, W. J. *James Baldwin: Artist on Fire*. Michael Joseph, 1990.
- 土屋和代「ブラック・フェミニズムとインターセクショナリティ——人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティ」『「いま」を考えるアメリカ史』藤永康政, 松原宏之編著, ミネルヴァ書房, 2022 年, 227–53 頁。